

今、再びの日本一に

茶産地の威信をかけ、品質を競い合う全国茶品評会

本年度は8月23日から26日までの4日間、鹿児島県霧島市で開かれた

普通煎茶10キロの部で川根本町産川根茶が堂々のトップ3を独占

風評に苦しんだこの地域に差した一筋の光明は

川根茶産地の未来を照らす大きな可能性となった

第65回全国茶品評会

目的 日本茶業の将来を展望し、茶業経営の一層の発展を図るため、全国の都道府県で生産された茶の特質を明らかにする。茶の生産近代化と需要拡大を図り、わが国の茶業の発展に資する。

主催 第65回全国お茶まつり実行委員会（鹿児島県、(社)日本茶業中央会、全国茶生産団体連合会、霧島市、(社)鹿児島県茶生産協会、鹿児島県経済農業協同組合連合会、鹿児島県茶商業協同組合、鹿児島県茶業会議所、霧島市茶業振興会、始良・伊佐地区茶業振興会、あいら農業協同組合ほか）

出品数 普通煎茶30^{キロ}95点、普通煎茶10^{キロ}135点、普通煎茶4^{キロ}162点、深蒸し煎茶147点、かぶせ茶68点、玉露104点、てん茶69点、蒸し製玉緑茶111点、釜炒り製玉緑茶86点

審査概評（普通煎茶10^{キロ}） 全国各茶産地より昨年を上回る出品数があった。上位、中位には栽培、製造技術の高さをうかがわせる優品が多く見られた。一方、外観が優れていながら、内質で点数を落とすものも散見された。

表彰 受賞者は11月12日、鹿児島県霧島市（霧島市市民会館）で開かれる「第65回全国お茶まつり鹿児島大会」の式典で表彰される。

再び日本一の栄冠に輝いたつちや農園・土屋鉄郎さん宅の裏に広がる茶園。山肌を切り開いてつくられたその茶園は肥料一つ運ぶのも苦勞するほどの急勾配。それでも鉄郎さんは「この環境は茶作りに適している」と話す。写真は土屋鉄郎さん、清子さん、娘の裕子さんと。

本紙7月号の特集で取り上げたように、東京電力福島第一原子力発電所（福島第一原発）で発生した放射能事故により、川根茶産地は大きな打撃を受けた。調査した結果、放射性物質は安全な数値内に収まっていたものの、世間からの風評は日ごとに増し、落胆してしまう茶農家の声も数多く聞かれた。

「お茶だけでは食べていくことができない」という理由で専業農家が減り、「後継者がいないから」という理由で茶作りから離れる人が増える。そんな、従来からの問題を抱えるこの地域にとって、放射能汚染という脅威は、暗いムードに拍車をかけるような出来事だった。

しかし今回、そんな暗い雰囲気を一気に吹き飛ばし、見事、再び「日本一」に輝いた川根茶。高品質な山のお茶というイメージ戦略を掲げる川根茶産地にとって、また、誇りと情熱を注ぎ続ける茶農家たちにとって、この上ない喜びをもたらす話題となったことだろう。

本号ズームアップ2では、本品評会などの入賞者に直撃インタビュー。受賞の喜び、茶業にかける思いなど、あますことなく語ってもらった。

日本一という大きな名誉。これから川根茶産地は、この称号をどのように生かしていくべきだろう。

日本茶業の将来を展望し、茶業経営の一層の発展を図るために開催される第65回全国茶品評会の審査会は8月23から26日までの4日間、かごしま茶流通センターおよび鹿児島県市町村自治会館で開かれた。今年の品評会には18都府県から977点（県内115点）が出品され、4日間にわたり厳正な審査が実施された。その結果は26日発表され、普通煎茶10^{キロ}の部でつちや農園・土屋鉄郎さん（水川）、丹野園・丹野浩之さん（水川）が最高位の農林水産大臣賞を獲得。同部3位に当たる一等三席には高田農園・高田智祥さん（藤川）が入賞し、1位から3位を本町産川根茶が独占するという快挙を成し遂げた。成績優秀な市町村に贈られる「産地賞」についても、普通煎茶10^{キロ}の部で、本町が3年ぶりの栄冠を手

風評を乗り越え、
今、明るいきざし
「日本一」の称号が
これからの川根茶産地に
もたらすものは
何なのだろう